2022年12月4日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

「恵み」の誕生

［ルカによる福音書1章5～20節］

ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには子供がなく、二人とも既に年をとっていた。さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

 [１] ザカリアとエリサベト

今日はアドベントの第2週になります。このイエス様降誕の前の時期は大体、マリアとかヨセフなどの物語を聖書から読むことが多いのですが、この朝はザカリアとエリサベトという老夫婦と、その間に生まれたヨハネ誕生にまつわる物語をご一緒に見て参りたいと思います。私も準備をする中で、新しい恵みを与えらたように思うので、ご一緒に分かち合いたいと思うのです。

ザカリアとエリサベトは、旧約聖書では重んぜられている祭司の家系であったようですね。（レビ人）。エリサベトはアロンの家系の娘の一人だったとあります。そして「二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった」と書かれています。二人は神様を信じながら誠実に生きてきました。しかし二人にも苦しいことはありました。それは彼らのは子どもが与えれていなかったということです。「エリサベトは不妊の女だった」などと、今では表現に気をつけなければならないような言葉で書かれてありますが、当時の特にユダヤ人にとっては、このことは、自分たちは神の祝福から外れているのではないかと思い、また周りからもそのように見られていたに違いない、そんな生き辛さも抱えていたのではないかと思うのです。当事者だけが知る悩みです。その夫ザカリアに、神殿の務めをしている時、天使が告げました。「あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ」（1:13～14）と言うのです。

救い主の誕生ではありません。その先駆者・バプテスマのヨハネが生まれる、という予告です。あなた方を親としてと。まあ彼は神の子ではなく、一人の預言者のような存在の誕生ですが、このことはクリスマスの出来事と深く結びついている物語なのだな、と思いました。

この時のザカリアのことを考えてみましょう。彼は神殿の中に入って香を焚く役割を与えられました。それは彼の意思ではなく、くじ（主の御心）に当たったということです。光栄ある務めであり、そして彼の背後では多くの民衆がその役割のために祈っていたとあります。つまり共同体の事柄になっている訳です。そこで、天使ガブリエルからの驚くべきお告げを聞くのですね。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子の名をヨハネと名ずけなさい」。そしてその後、生まれてくる子がどういう使命を帯びるのか、具体的に告げています。そこにはイスラエルの歴史がかかっています。それに対してザカリアの応答はどうだったでしょうか。18節以下です。―「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています」。私は彼が信仰がないとは思いません。これまでの彼の律法理解を超えた言葉だったのだと思います。「何でそれを信じることが出来るのか、証明して欲しい」というように、天使に食ってかかっているのです。彼の心はこうだったのかもしれません。―私たちはいつか子どもが与えられることを信じてずっと生きてきた。何年も何十年も。しかしそれは空しかった。神様は私たちのことを顧みて下さらない。もう、私たちは諦めたのです。自分たちの跡継ぎのことも、神様の祝福についても…。私たちはなぜか分からないが、神様のお心に適わないのだろう。だからもういいんだよ。―彼は、いつしかそんな自分の運命を呪う穴倉の中に入ってしまっていたのではないでしょうか？

［2］ 「呪いの言葉」からの解放

これは私たちにも思い当たる節はないでしょうか？私たちの周りにも、作られた「呪いの言葉」は沢山あります。例えば「もう年寄りなんだから」。ザカリアも言ったもっともらしい言葉です。もっともらしく聞こえる所が「呪い」の本質だと思います。「男だから」とか「女だから」というのも呪いの言葉です。「こんな家系だから」とか「こんな親だから」「こんな学歴だから」というのも「呪いの言葉」です。『前科者』という映画もありましたが、「（お前は）前科者だから」もそうですね。「呪い」は人を諦めに導く言葉です。そして自分を追い詰め、先を望むことを断念させ、自らの運命を呪い、穴倉に閉じ籠めてしまいます。そこから人はなかなか抜け出せなくなってしまうのです。

けれども、神の天使は、人間には語れない解放の言葉を告げるのです。19節では「喜ばしい知らせ」を伝えるために来たと言っています。天使は二人に産まれる男の子について、「その子をヨハネと名付けなさい」と言いました。―「ヨハネ」。その意味は「主は恵み深い」ということです。ずっと、ずっと神様に見離された存在だとどこかで思っていた自分に、私はあなたに「ヨハネ」を与えると。それは神の恵み・慈しみがあなたと共にある、ということです。「ザカリア」という名も、「主は覚えておられる」と言う意味です。あなたは決して私の祝福の外にいるわけではない、いや、あなただけではない、自分の運命を呪い、神を恨み、光のない世界に入り込んでしまう者たちに、あなた方は覚えられているのだ、決して神は呪いを人間には与えないのだということを示すために「ヨハネ（恵み）」をこの地上に送るのだ、と。また、先ほども申しましたが、ザカリアが独りぼっちで神様に仕える仕事をしているようであっても、その周りで祈っている人々もいるのです。実は独りぼっちではない。神様は私たちを孤独にはなさならないのですね。歴史の支配者である神様は、新時代の幕開けに、まずヨハネ＝「恵み」をこの地上に与えられる。年老いた夫婦に、新しい命が誕生する。そして、その先駆者ヨハネは、「イエス」（「主は救い給う」の意味）、正に救い主を迎えるために、あなた方は道を真っ直ぐにせよと荒野の中で、希望を失っている者たちに呼びかけるのですね。ついでに言うならば、この天使ガブリエルは、既に旧約ダニエル書8、9章でも現れていますし、何といってもあのマリアに、「あなたは身籠って男の子を生む。それをイエスを名付けなさい」という受胎告知をしたのもこのガブリエルです。神様は生きておられます。神様は神様の方法で、私たちに未来を与えられるのです。そこには「呪い」などありません。今、「恵み」の時代が始まっているのです。

［3］ 新しい口を与えられる

ザカリアは、神様から一時期口を封じられ話せなくなりましたが、しかし1章63節を見て下さい。板を渡され、「この子の名はヨハネ」と書いた時に再び口が利けるようになったと書かれています。彼は審かれたというより、「新しい口」を与えられたのだと思います。64節には「するとたちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた」とあり、その後には彼の賛美（預言）の言葉も記されています。老人であるザカリアも、今、新しい新約の世界を開く神の御業に心震えています。そして、エリサベトはどうでしょう。皆さんご存知でしょう。幼くして神の子を宿すようになった親類のマリアと出会い、夫々の胎の中の赤ちゃん同士が踊った、と美しい場面が1:39以下に記されています。そしてマリアに語ったエリサベトの言葉、これは、今私たちに語られている祝福の言葉だと思います。1章45節です。―「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう」。―これは正にエリサベトの体験でもありましたね。

　私たちも、「主」の言葉だけを信じ、私たちを脅かすあらゆる呪縛から解き放たれ、舌をほどいて頂いて、神様を賛美する者にされているのです。感謝致しましょう。

お祈りいたします。

主イエス・キリストの神様、アドベント第２週の礼拝に共に与ることが出来、感謝致します。「ヨハネ」それは、「恵み」だと聞きました。私たちは自分を呪うような言葉、うつむき、人生を諦めさせるような言葉や出来事に囲まれています。しかし、私たちを本当に囲んでいるのは、あなたの恵みです。そして、イエス・キリストの愛です。この世の一切の「呪い」は、主が十字架で全部背負って下さいました。私たちの口を開き、賛美の唇として下さい。これから行う主の晩餐式でも、あなたの恵み、あなたの愛を新しく頂くことが出来ますように。一人でも多くの方と共にこのクリスマスの「良きおとずれ」に与らせて下さい。

主の御名によって祈ります。アーメン。